

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化を通じた
機運醸成策に関する関係府省庁等連絡・連携会議（第1回）

議事概要

1. 日時：平成27年11月26日（木） 9：30～10：50
2. 場所：合同庁舎8号館8階 特別中会議室
3. 出席者：

遠藤 利明	東京オリンピック・パラリンピック大臣
平田 竹男	内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会 推進本部事務局長
横尾 英博	内閣官房知的財産戦略推進事務局長
青柳 正規	文化庁長官
松永 明	内閣官房内閣審議官（内閣官房副長官補付）
原田 淳志	総務省地域力創造審議官
今林 顯一	総務省情報流通行政局長
新美 潤	外務省国際文化交流審議官
柴崎 澄哉	国税庁長官官房審議官
藤井 康弘	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長
大角 亨	農林水産省大臣官房審議官（兼食料産業局）
安藤 久佳	経済産業省商務情報政策局長
古澤 ゆり	観光庁審議官
多羅尾 光睦	東京都生活文化局長
中嶋 正宏	東京都オリンピック・パラリンピック準備局長
山本 隆	東京都産業労働局長
布村 幸彦	公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員 会副事務総長

（オブザーバー）

- | | |
|---------|-------------------------|
| 橋本 光男 | 全国知事会事務総長 |
| 荒木 慶司 | 全国市長会事務総長 |
| 石田 直裕 | 全国町村会事務総長 |
| 柄 博子 | 独立行政法人国際交流基金理事 |
| 木村 守平 | 独立行政法人国立文化財機構法人本部総務企画課長 |
| 茂木 七左衛門 | 独立行政法人日本芸術文化振興会理事長 |
| 太田 伸之 | 株式会社海外需要開拓支援機構代表取締役社長 |
| 前田 茂樹 | 独立行政法人日本貿易振興機構理事 |
| 山崎 道德 | 独立行政法人国際観光振興機構理事 |

（事務局）

- | | |
|-------|---|
| 岡西 康博 | 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会
推進本部事務局企画・推進統括官 |
|-------|---|

清水 幹治 内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局参事官

※下線は代理出席

4. 議事要旨

・遠藤東京オリンピック・パラリンピック大臣より挨拶。

【遠藤大臣】

今日は「文化を通じた機運醸成策に関する関係府省庁等連絡・連携会議」ということで、大変難しい名前だが、機運醸成に何かいい言葉はないか、いいアイデアがあれば是非教えていただきたい。

東京オリンピックが決まり2年たった。当初はまだ7年あると思っていたが、現実にはもう5年を切ってしまった。今年の夏は、国立競技場の問題、エンブレムの問題で皆様に大変なご迷惑をかけた。そうした作業をするにつけ、もう時間が足りないという思いでいる。

しかし反面、地方に行くと、オリンピック・パラリンピックはしよせん東京でしょう、私たちはあまり関係ないという声も聞かれるし、また被災地からは、自分たちの復興の方が大事だからそちらを優先して欲しいという声もある。そうしたときに、国民の皆さんに協力していただき、また参加をしたいいただき、みんなで盛り上げるオリンピック・パラリンピックにしなければ、成功した大会とはならない。本日ご出席のみなさんにいろんな知恵を出していただき、国民一体となった素晴らしい大会にしていきたい。

オリンピック・パラリンピックは、もちろんスポーツの大会だが、同時に日本の新しい技術、環境等の新技術、日本がもつ文化や伝統、私の地元には薪能という素晴らしい文化もあり、先日新潟の方からは5000年前の縄文土器の文化があると聞いている。また、自然景観の美しさ、おもてなしの心、和の食事、こうしたものを通じて世界の皆さんに喜んでもらえるものを全国津々浦々から出していただき、スポーツのみならず文化、伝統、芸術等を通じた素晴らしい大会にしていきたいと考えている。

本日は、構成員として、関係省庁だけでなく、東京都及び組織委員会にも来ていただき、オブザーバーには、地方三団体など、多くの関係機関の方の参画を得ることができ、大変心強い。機運醸成という言葉はもう一つすっきりしないが、機運醸成を図るため、皆さん方でしっかり情報共有・連携を進め、一体感を持って素晴らしい大会にさせていただくようお願いしたい。

- ・事務局から、資料1-1により「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化を通じた機運醸成策に関する関係府省庁等連絡・連携会議の開催について」説明し、了承。
- ・事務局から、資料1-2により「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化を通じた機運醸成策に関する関係府省庁等連絡・連携会議運営要領（案）」を

説明し、了承。

・関係構成員より、資料2-1から資料2-6により「各機関の施策について」を報告。

・文化を通じた機運醸成策に関する意見交換

【厚労省】

厚労省も、障がい者芸術ということで、2020年に向けて盛り上げてまいりたい。プレゼンの中で、東京都を中心に、障がい者芸術についても組み込んでいただいております、ありがたい。

厚労省としても、障がい者芸術を盛り上げていく方向でいくつか考えていることがあるが、簡単にご説明させていただきたい。

一つは、今年6月に、「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた障害者の芸術文化振興に関する懇談会」を文化庁と立ち上げた。障がい者芸術の関係者十数人と集まり、情報共有やネットワークの構築をしながら、広く関係者による意見交換を行う枠組みを作っている。

もう一つは、毎年各県持ち回りで、全国障害者芸術・文化祭を実施している。これも、2020年に向けて、文化プログラムにつなげていくための事業を予算要求に組み込んでいる。また、障害者の芸術活動支援拠点モデル事業ということで、全国に何か所か芸術活動支援拠点を作って、各拠点が連携を図っている。オリパラに向けて、2016年にリオで開催されるオリパラや文化プログラムにどのように貢献できるか、研究していただく予定である。

私共もいくつか取組をしていくので、文化庁や東京都、組織委員会、各団体の皆様と連携を図っていきたい。

【文化庁】

今、厚労省から話があった障がい者芸術に関してだが、ロンドン大会の時もアンリミテッド(Unlimited)として、文化プログラムの中で障がい者に対する目配りがされていた。今、お話があったアールブリュットに関しても、東京都のリーディングプロジェクトに選んでいただいております、このアールブリュットについては、この会議の中で、どのように関係府省庁、団体、地方自治体が協力していけるかということを組み立てる一つのモデルになるのではないかと感じている。

アールブリュットについては、滋賀県が非常に力を入れており、全国アールブリュットネットワークを作っている。文化庁に来る前は私もそこで会長をしていた。それから、先ほど話にあがった、障がい者の芸術文化振興に関する懇談会についても私が文化庁長官になる前に、委員長をやっていた。この会議において、一つのモデルとしては、創造都市で有名なナント市もアールブリュットに関心を持ち、滋賀県と交流を持ち始めている。国際的な展開も含め、協力事業、連携事業のモデルにできるのではないかと思った。

【観光庁】

観光庁のほうで今取り組んでいる 2020 年東京オリパラ大会に向けた取組を紹介させていただきたい。

観光庁ではインバウンドのお客が増えており、2020 年に向けてきちんとした受け入れ環境を整えるべく、CIQ や宿泊が担保されるように取り組んでいる。また東京に来たお客様に地方を回ってもらえるように、北海道から九州まで全国 7 か所、広域観光周遊ルートを設定し、地元と一緒に作っているところである。プロモーションについても、2020 年に向けて、文化プログラムのみならず、その他の分野で、各省庁と連携させていただいているが、今後とも、2020 年に向けても連携の仕方もご相談させていただきたい。

また観点が違うものの紹介だが、文化財を外国のお客様にご紹介するときに説明や解説が必要になる場合、現在は日本語での説明のみのものが多く、英語での説明がない、もしくは仮にあったとしても、日本語の直訳のような解説で、初めて見た外国の方には理解しがたいものがある。結果として、説明が不十分であり、外国の方に日本の文化財の魅力が十分に伝わっていないという残念な状況である。このたび、2020 年の大会を見据えて、文化庁と一緒に有識者会議を立ち上げ、外国人が日本の文化財を快適かつ、有意義に鑑賞できるよう、英語でのわかりやすい解説や表示の仕方を検討している。

【知財事務局】

この会議で何をやるかということについて、先ほど組織委員会から発表があったように、ロンドンオリンピックと同様、東京 2020 大会の文化プログラムをつくり、このもとでやっていくという形態で、東京大会を目指して開催される全ての文化関連プログラムが、この文化プログラムの傘の下に入るということであればわかりやすいが、そうはならないかもしれない。

例えば、経産省から紹介があった東京大会を念頭においた全ての取組が、文化プログラムに入らないかもしれない。そういった取組を日本全体としてどのようにブランディングしていくのか、ということが鍵になってくると感じている。

そういう意味では、前回のロンドン大会が参考になる。9 月にロンドンに出張した際、担当の責任局長から話を聞いたところ、ロンドンでは、文化プログラムとは別に、グレートキャンペーンというものを実施していて、これはロンドン大会の 1 年前から急遽、始めたということ。文化プログラムとは別の格好で、政府全体、官民一体となった取組をどのようにやったのかというのは一つの参考になるので、そこをどういう風にしていくのかということ、この会議で考えていけばよいのではないかと。

【組織委員会】

組織委員会で先ほどお示した文化プログラムについては、正式なロゴマークは、開催都市の東京都、政府はお使いいただける、またスポンサーになった企業は利用可能である。

それ以外のところを巻き込む、エンゲージメントするための一つの手立てとしてノンコマースマークというもので、概念に合うものは、認定させていただいて、一緒になってアクション&レガシープランの中に盛り込んで、できるだけ広げていきたい。しかしながら、スポンサー企業とバッティングする活動、営利的な活動は入れないので、グレートキャンペーン、既に東京都が、「&TOKYO」という形で同じ趣旨のキャンペーンを始められているので、全国的にどのように展開するのかというテーマはあるかと思う。

【CJ 機構】

せっかくなので、1 つご提案であります。私は長く、ファッション業界にいるのだが、ファッション業界におけるオリンピックはパリコレである。パリコレは世界のデザイナーが多く集まってくるが、加えて、お客様としてもセレブが集まってくる。日本の有名な女優も観客として行くが、ほとんどカメラマンから写真にとられることなく、ポツンとしている。やはり国内でとても有名なのだが、世界では無名に等しい。一方で、海外の女優はバシバシ写真を撮られており、とても人気が高い。

日本固有の文化は別として、世界共通の文化ジャンルについては、世界に名の通っているアーティストをうまく活用したイベントをたくさん実施するのがよいのではないか。

長く世界で、トップランナーで評価され続けている人は非常に少ないが、その人たちをうまく使って、次世代の同じジャンルの人たちと組ませて、明日につなげてレガシーを作っていくイベントをしてはどうかと思う。例えば、私のいたファッション業界で言えば、高田賢三という人は、70年代のパリコレで、10年間トップランナーのサンローランといつも争って、世界で非常に評価されているトップランナーである。2020年は、デビュー50年になるので、次なる世代と組んで、オリンピックの期間に大きな展覧会ができないかと。次のアーティストにつなげるというコラボをしてはどうですかと提案した。そういう世界でトップランナーとして評価されている人をうまく使ってアピールするなど、世界の人に可能性を感じてもらえるイベントができればと思っている。

【文化庁】

そういうことを見込んで、国立新美術館来年の春から「MIYAKE ISSEY 展」を行う。日本人で海外で一番有名なのは三宅一生だと思う。「MIYAKE ISSEY 展」は、海外展開をしたいと思っている。

そういったアイデアをいただき、文化庁としてやっていきたい。経産省が伝統的工芸品について言及していたが、文化庁としても、現在計画段階だが、伝統工芸は、日本のモノづくりの原点であり、日本の精神の原点でもあり、2020年に向けてエンカレッジしていかなくてはいけない。そこで、北陸3県で工芸サミットを実施しようと考えている。その際には、経産省のご協力もいただき、より機運を盛り上げる形にしたいと考えている。

・平田オリパラ事務局長より総括。

【平田局長】

オリパラに向けて文化は重要であり、しっかりとまとめあげたいと思っている。明日の朝、オリパラ推進本部、これは総理のもと全閣僚が参加する会議があり、特別措置法に基づく基本方針を決定する。その基本方針の中で、文化に関しても、特別に項目を立てて位置づけている。

一昨年、オリンピックの東京開催が決まって以降、文化庁や知財事務局で文化をどうするのかという勉強会を開催していただいている。勉強会を通じて、トップランナーの方、地場の方、外国の方、若者、大御所、こういった方々にどのように連携していただくのが非常に重要だということ、2020年を契機に今までなかなかありえなかったことを、創意工夫して実現したいという方が多くいるということ等を学んだ。また、レガシーづくりの観点からも、文化行政を整えることや、日本人が日本の文化を知らないということ等を2020年に向けてどのようにしていくかということが重要であると認識しているところである。

来年から東京大会まで4年ということであるが、政府としてやらなくてはいけないことは、文化プログラムの定義やグレートキャンペーン等仕掛けの問題、また行革の中での文化予算についても連携を深めていきたい。また、劇場不足の問題も政府として連携を深めたい。なかなかありえなかったことを実現するということでは、国宝や政府のとおきおきの場所をどのように使っていくのかも論点になる。

このように政府の手の届くところに関しても、文化関連の仕事があり、ぜひ連携をさせていただければと思っている。いずれにしても、ふつうの文化行事ではなく、2020年に向けて、とおきおきの内容、わざわざ、というものを、どのように準備するかということ、力を合わせてやっていきたい。日本はロンドンよりも文化のバラエティが多いので、文化プログラムについては、アンブッシュ問題を乗り越えて、連携できるようなものをぜひ作っていききたいと思っている。

東京都がリーディングプロジェクトをはじめ、素晴らしいものを作ってくださっているので、全国に広げていきたい。

最後に、この会議は、定期的開催させていただくが、その間にも情報交換をさせていただき、政府としてもさすが日本というものをまとめたいし、内閣官房としても予算はじめ、色々な連携の仕方についてもぜひここで議論したいと思う。本日はありがとうございました。

・閉会